西野々古墳群
確認調査概要

―府営農村総合整備事業「伏見堂地区」に伴う確認調査―

令和５年３月

大阪府教育委員会

序文

令和元年より府営農村総合事業「伏見堂地区」に伴って実施しています本府文化財保護課の試掘・発掘調査は３年目に入りました。当地区では古くは縄文時代、弥生時代の遺物が出土しており、それ以降古墳時代では６世紀代に東方の山腹に築かれた田中古墳群とともに、石川右岸段丘面に西野々古墳群の数基の古墳が今もその墳丘をとどめています。

今年度はこの古墳群の遺存状態を確かめるべく、墳丘周辺において確認調査を行うこととなりました。本書に報告する調査結果は、これまでの知見に新たな成果を追加できると考えています。

調査の実施にあたっては、地元関係者ならびに富田林教育委員会、大阪府環境農林水産部の方々に、多大なご理解とご協力をいただき、深く感謝申し上げます。

今後も文化財の保護、活用に全力を尽くす所存ですので、皆様のご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

令和５年３月

大阪府教育庁文化財保護課長
稲田　信彦

例言

１．本書は、大阪府教育委員会が大阪府環境農林水産部の依頼を受けて令和３年度に実施した、府営農村総合整備事業「伏見堂地区」に伴う、富田林市伏見堂所在の西野々古墳群の確認調査報告書である。

２．確認調査は文化財保護課調査事業グループ主査　西川寿勝を担当者として実施した。

３．遺物整理は、文化財保護課調査管理グループ専門員　藤田道子を担当者として実施した。

４．令和３年度の調査番号は 21040 である。

５．本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が行った。

６．本書の執筆及び編集は文化財保護課調査グループ課長補佐　関真一・岡田賢・枡本哲が行った。

７．確認調査の出土遺物や写真・図面等の記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。

８．確認調査にあたっては、以下の方々よりご指導・ご教示・ご協力をいただきました。

富田林市教育委員会、大阪府環境農林水産部南河内農と緑の総合事務所、伏見堂自治会（順不同）

９．確認調査・遺物整理ならびに本書の作成に要した費用は、大阪府環境農林水産部及び教育庁が負担した。

凡例

1．本書で用いる座標値は世界測地系（国土地理座標第Ⅵ系）に基づき、方位針は座標北を示す。水準値は T.P. 値（東京湾平均海面）を用い、本文および挿図中では T.P. ＋○mと表記する。

2．遺構番号は、遺構の種類に関係なく、検出した順に付している。これは発掘調査での記録と合致する。また、掲載遺物に付した番号は通し番号で、挿図と図版の番号は一致している。

3．土層および遺物の色調については、『新版 標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 /2006 年度版）に拠る。

本文目次

序文
例言
凡例
第１章　調査に至る経緯と経過 1
第２章　調査の成果 3
　第１節　１号墳（明八塚）周辺の調査区 3
　第２節　２号墳（千代塚）周辺の調査区 7
　第３節　４号墳周辺の調査区 7
　第４節　古墳周辺以外の調査区 7
第３章　調査のまとめ 14

報告書抄録

挿図目次

図１　調査地位置図 1
図２　トレンチ位置図 2
図３　１号墳周辺の調査区 3
図４　トレンチ２東西断面図 4
図５　トレンチ３東西断面図 4
図６　トレンチ４東西断面図・平面図 5
図７　トレンチ５南北断面図 6
図８　トレンチ６南北断面図 6
図９　２号墳周辺の調査区 8
図 10　トレンチ７南北断面図 9
図 11　トレンチ８南北断面図 9
図 12　トレンチ９北東～南西断面図 9
図 13　トレンチ 16 平面図・南北断面図 10
図 14　４号墳周辺の調査区 11
図 15　トレンチ 10 東西断面図 11
図 16　トレンチ 11 東西断面図 12
図 17　トレンチ 12 南北断面図 12
図 18　トレンチ 13 東西断面図 12
図 19　トレンチ 14 東西断面図 12
図 20　トレンチ１東西断面図 12
図 21　出土遺物実測図 13

図版目次

図版１　１号墳（明八塚）・２号墳（千代塚）全景
図版２　トレンチ１・２・３・４断面
図版３　トレンチ５　断面
図版４　トレンチ６・７断面
図版５　トレンチ８・９断面
図版６　トレンチ 10・11 断面
図版７　トレンチ 12・13 断面
図版８　トレンチ 14・16 断面
図版９　出土遺物　1
図版 10　出土遺物　2

第１章　調査に至る経緯と経過

本調査は、令和元年に大阪府環境農林水産部耕地課と大阪府教育庁文化財保護課の間で行われた、府営農村総合整備事業「伏見堂」に伴う事業地内の埋蔵文化財の取り扱い協議に端を発している。その中で事業地に西野々古墳群その他周知の埋蔵文化財が含まれることから、本課は環境農林水産部に対し、埋蔵文化財の有無を確認する目的で試掘調査、確認調査を実施するよう指導し協力を求めた。そして同部より依頼を受けて令和元年に試掘・確認調査を行なった結果、古墳群以外にも中世の建物跡など集落跡の一端が検出され、その範囲も周辺に及ぶことが判明した。この結果に基づき令和２年９月に文化財保護法第 97 条の発見通知が環境農林水産部より提出され、新たに「西野々遺跡」として「周知の埋蔵文化財包蔵地」に加えられるところとなった。

以上のような経緯から、令和３年度は古墳に近接する休耕地における遺構の有無を確認するために令和３年 10 月より令和４年１月にかけて確認調査を実施した。調査は、墳丘周辺の周溝の有無と埋積土の状態を観察するために、各古墳に隣接して基本的に２ｍ×５ｍのトレンチを設定したが、堆積状況を詳しく把握するために延長するなど形状を変更したところもあり、結果として 14 箇所のトレンチを設定した。

調査は現耕土を小型重機によって除去し、それより以下は人力にて層毎に遺物の検出に注意しつつ掘り下げ、各層上面を精査し、遺構・遺物の有無を確かめた。掘削後はトレンチ壁面を清掃し、分層を行ない、写真を撮影後、実測図を作成した。

図１　調査地位置図（国土地理院発行２万５千分１地形図に加筆）

図２　トレンチ位置図

第２章　調査の成果

１号墳（明八塚古墳）は、古墳群の北端に位置し、直径約 40 mの墳丘が残存する。現水路を挟んだ地点に５箇所のトレンチを設定し、各トレンチの中世～現代の土層より中世～近世・近代の土器類が出土した。これに対して２号墳では３箇所のうち１箇所、４号墳では５箇所のうち３箇所から遺物の出土があったが、古墳に関連すると思われるものはトレンチ５の円筒埴輪片１点に過ぎない。

第１節　１号墳（明八塚）周辺の調査区（図３）

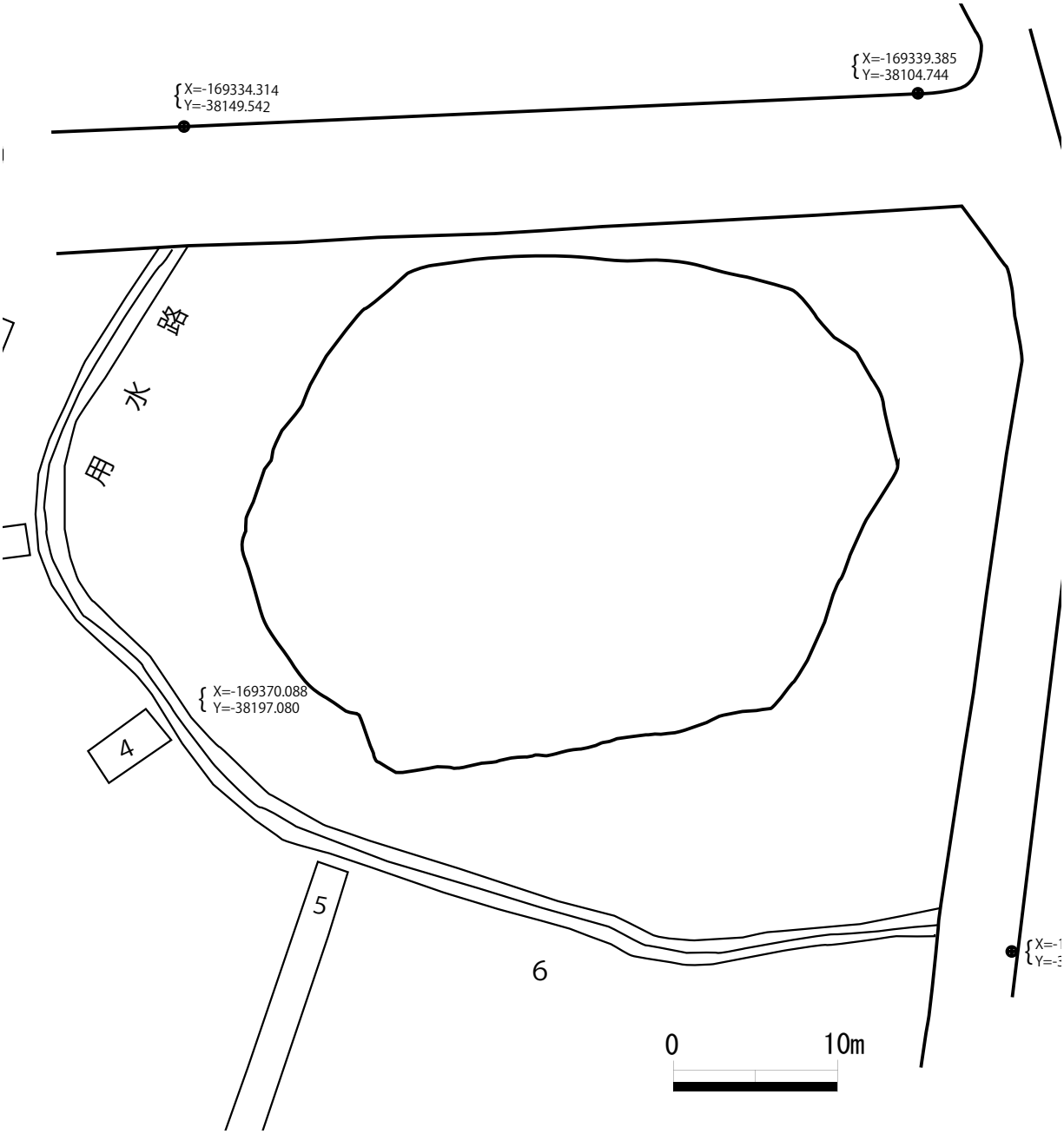


図３　１号墳周辺の調査区

現水路の西側に接して５箇所にトレンチを設定した。うちトレンチ５は下層の堆積状況を観察する目的で南へ延長し、結果全長 17 ｍとなった。

トレンチ２（図４）　２×５ｍのトレンチである。耕土・床土以下に中世耕土層（第４～７層）がほぼ水平に堆積する。それより以下は礫を含む粘質土や砂質土である。第１～５層まで土師器碗･皿片(図 21 － 1・2）や瓦器碗片が少量出土した。

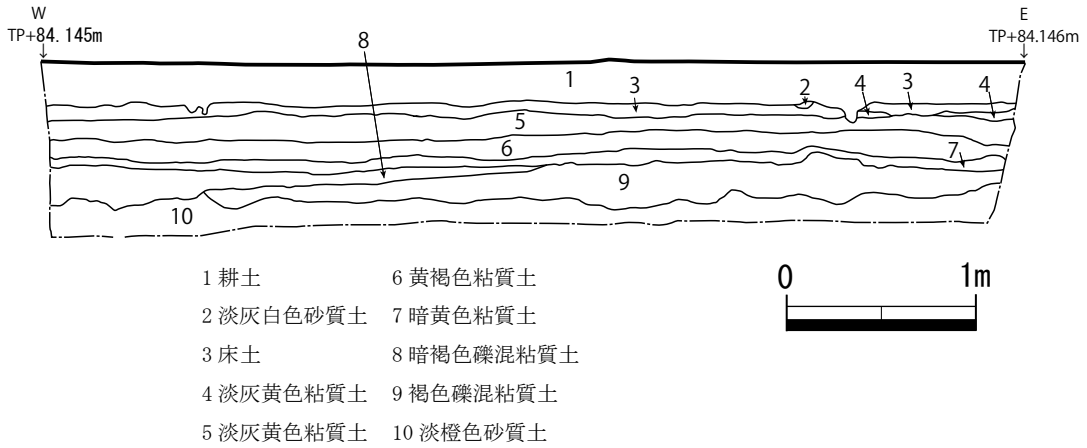


図４　トレンチ２東西断面図

トレンチ３（図５）　２×５ｍのトレンチである。耕土・床土以下に中世耕土層（第３～４層）がほぼ水平に堆積する。トレンチ２の堆積状況とほぼ同じである。第４層から瓦質鉢の口縁部片（図 21 － 3）が出土した。外面にヘラケズリの痕跡がある。

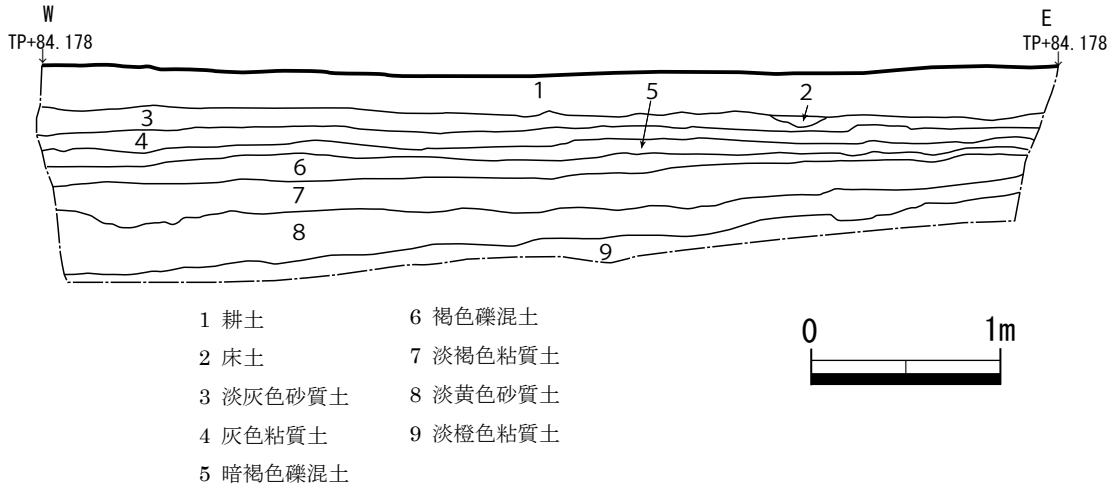
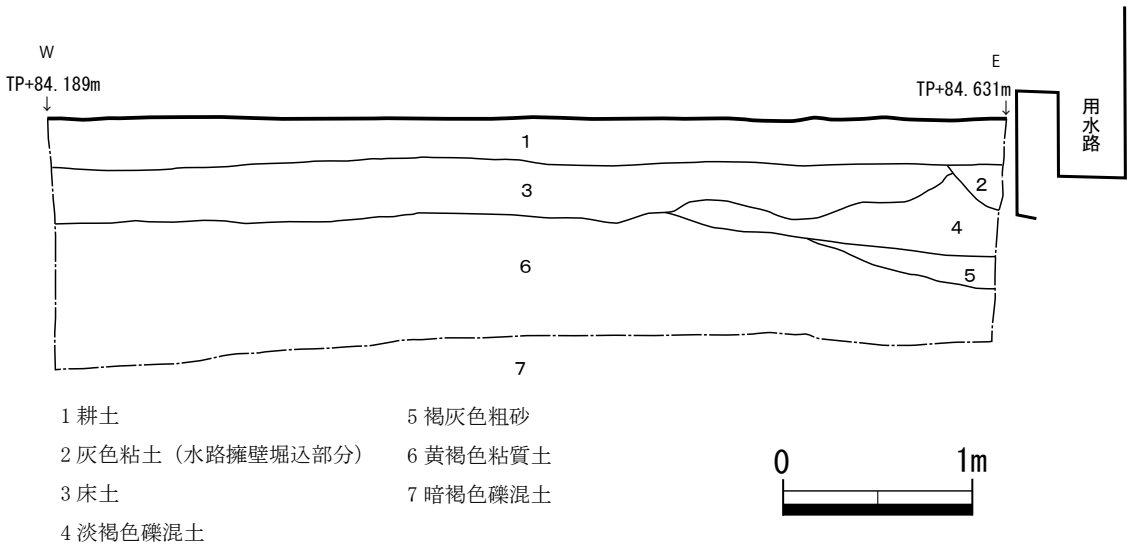


図５　トレンチ３東西断面図

トレンチ４（図６）　２×５ｍのトレンチである。耕土･床土以下に粘質土･礫混じり土が堆積するが、第４・５層は現用水路以前の古い水路の堆積土とみられる。第３・４層から須恵器片、土師器片が出土しているが細片のため器種等は不明である。

トレンチ５（図７）　２×17ｍのトレンチである。耕土・床土の下に第３・４層の中世耕土層があり、このレベルまではほぼ水平な堆積を示している。それ以下の土層は礫を含み土石流の痕跡と思われる。第６層はその激しい土石流の堆積後に一帯を均一に覆う砂を主体とする土壌で、その後に耕作地としての土地利用が始まったと考えられる。第３～５層より遺物の出土があった。図化できたのは円筒埴輪片１（図21－８）、須恵質鉢片１点（図21－4）、土師質小皿片３点（図21－５～７）である。円筒埴輪片は淡橙色の須恵質で、低平なタガが付き６世紀前半とみられる。土師質小皿（図21－５）は平たい底部より口縁部が短く斜めに立ち上がる器で、13世紀代とみられる。その他細片では高台底部を辛うじて残す13世紀後半とみられる瓦器碗底部片のほかに、前述の土師質小皿、それに土師器甕または壺がある。

トレンチ６（図８）　２×４ｍのトレンチである。耕土・床土以下に礫を含む土層が堆積する。うち第３・４層は現用水路以前の古い水路の堆積土とみられる。床土より須恵器坏、土師器の細片が出土している。



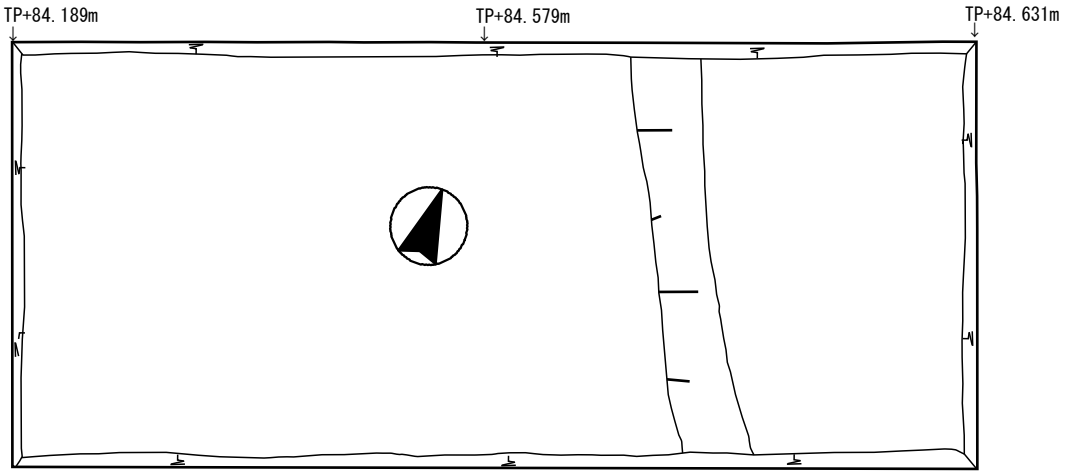


図６　トレンチ４東西断面図・平面図

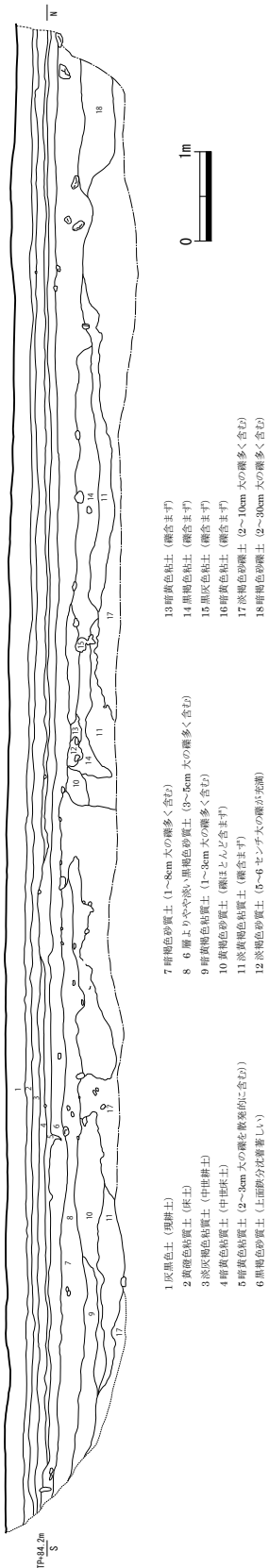
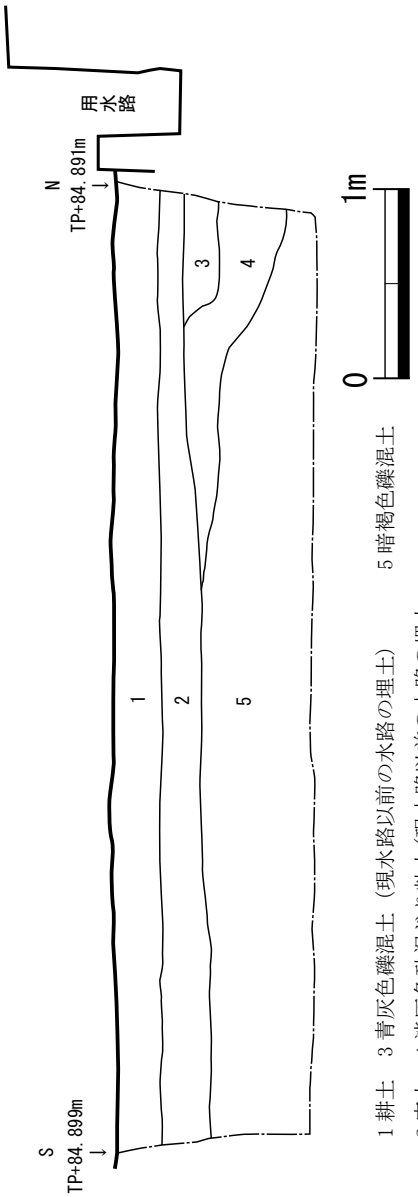


図７　トレンチ５南北断面図



１耕土　３青灰色礫混土（現水路以前の水路の埋土）　５暗褐色礫混土
２床土　４淡灰色砂混じり粘土(現水路以前の水路の埋土

図８　トレンチ６南北断面図

第２節　２号墳（千代塚）周辺の調査区（図９）

２号墳は直径約 30 mの墳丘が残存している。トレンチを墳丘北側に２箇所、南側に１箇所設定した。さらにトレンチ８の北東部の堆積土を詳しく観察するためにこれを北へ拡張し、別にトレンチ 16 とした。

トレンチ７（図 10）及びトレンチ８（図 11）は　２×９ｍのトレンチであり、耕土直下で礫土を確認し、一部下層確認のため掘り下げた。遺物は出土していない。

トレンチ９（図 12）　２× 4.2 ｍのトレンチである。耕土・床土・砂礫土（第１～３層）の水平堆積以下に褐色砂礫土（第４層）の落ち込みがみられる。その基盤となるのは黄色系の粘質土（第５層）である。土石流に起因すると思われる褐色・暗褐色系の礫土が堆積する２号墳北側一帯の堆積状況とは違っている点が注意される。第４層から陶器片が出土している。

トレンチ 16（図 13）　トレンチ８の北側に拡張して、同地点の堆積土についてより詳しく観察する目的で設定した４×９ｍのトレンチである。耕土･床土以下は礫土であるが、南端で南に落ち込む状況（第４層）が確認された。北の肩を捉えただけであるが、トレンチ内では東辺１ｍ、西辺で 0.7 ｍを確認し、ほぼ東西方向である。耕土・床土より瓦器碗片、土師器片が出土している。

第３節　４号墳周辺の調査区（図 14）

４号墳は東西約 20 ｍ、南北約 15 ｍの墳丘が残存しており、墳丘周囲に計４箇所のトレンチを設定した。現用水路の東側の２箇所を除き、３箇所は墳丘裾際までトレンチを設定した。

トレンチ 10（図 15）　２× 5.4 ｍのトレンチである。耕土・床土以下は礫土である。浅いレンズ状の堆積土がみられた（第３層）。第１・２層から近世・近代の陶磁器片が出土している。

トレンチ 11（図 16）　２× 5.2 ｍのトレンチである。耕土以下はすべて礫土である。出土遺物はない。

トレンチ 12（図 17）　２× 5.5 ｍのトレンチである。耕土以下はすべて礫土である。墳丘裾では墳丘盛土より崩れた石が混じる。出土遺物はない。

トレンチ 13（図 18）　２× 5.7 ｍのトレンチである。耕土以下は礫土で、墳丘裾付近では崩れた土・石が混じる。出土遺物はない。

トレンチ 14（図 19）　２× 5.1 ｍのトレンチである。耕土・床土以下には褐色系の土が堆積するが、墳丘裾に至っては耕土直下に北へ隆起する礫土が露呈する。耕土中より土師器細片が出土した。

以上５箇所のトレンチの墳丘に接する部分では、いずれも締まりのない砂・礫を主体とする盛土の立ち上がりが観察された。

第４節　古墳周辺以外の調査区

伏見堂公民館の北約 100 メートルの水田に１箇所トレンチを設定した。

トレンチ１（図 20）　2.5 × 2.5 ｍのトレンチである。耕土・旧耕土・床土以下に中世耕土層とみられる淡灰褐色土（第４層が）ある。同層より瓦器・土師器細片、土師質小皿片が出土している。小皿は平たい底部から口縁部が短く斜めに立ち上がる 13 世紀代と思われる器である。

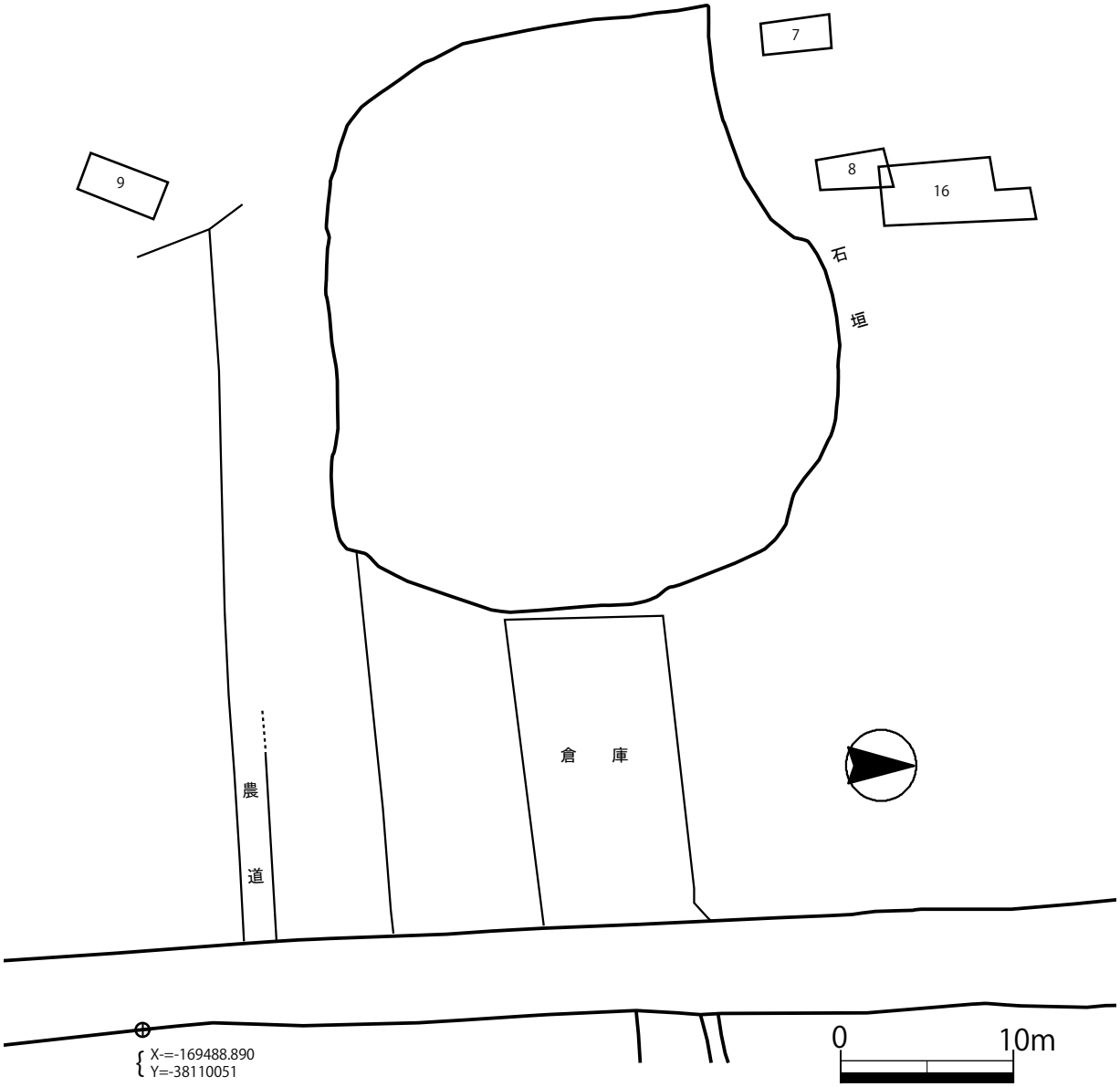


図９　２号墳周辺の調査区

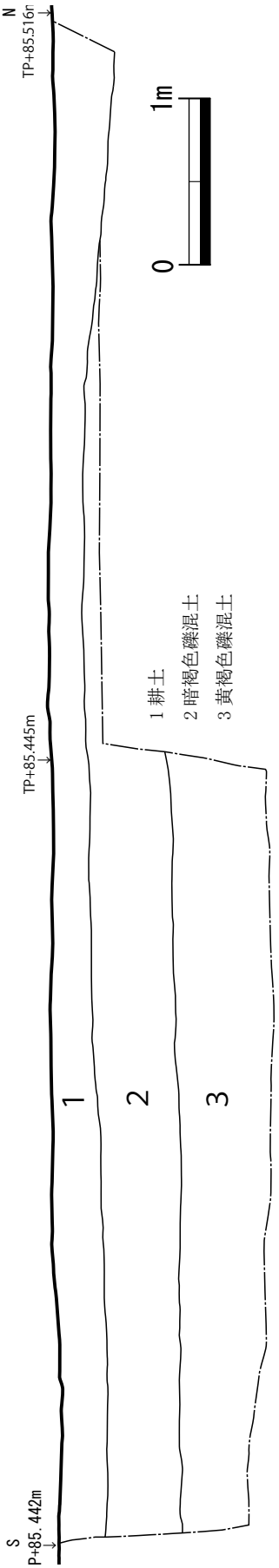


図 10　トレンチ７南北断面図

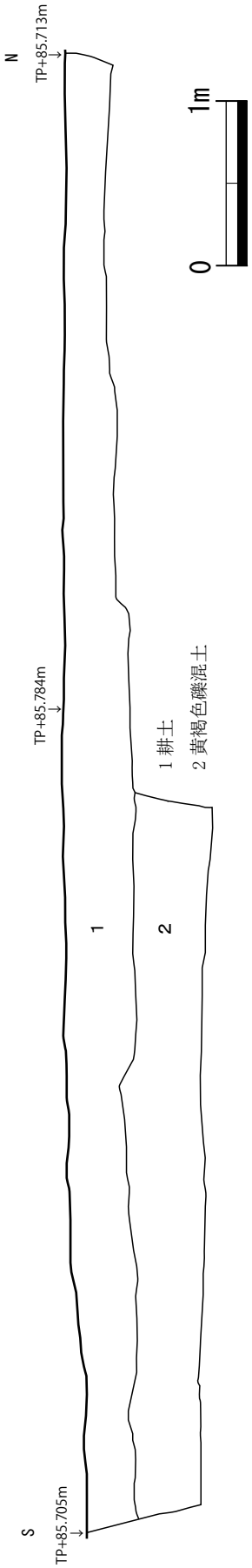


図 11　トレンチ８南北断面図

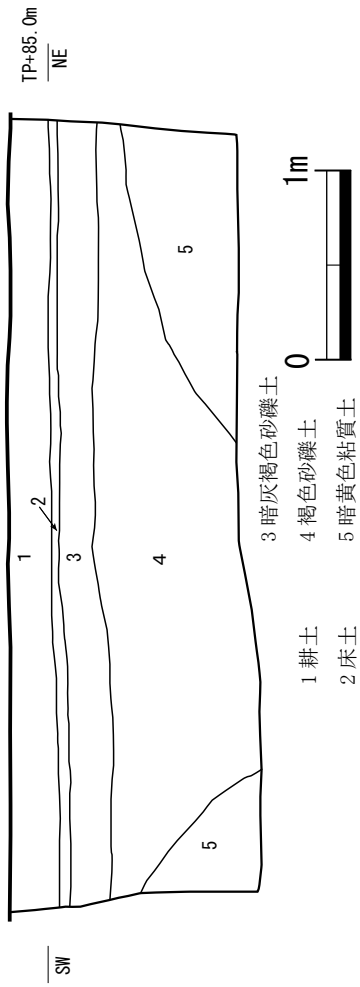


図 12　トレンチ９北東～南西断面図

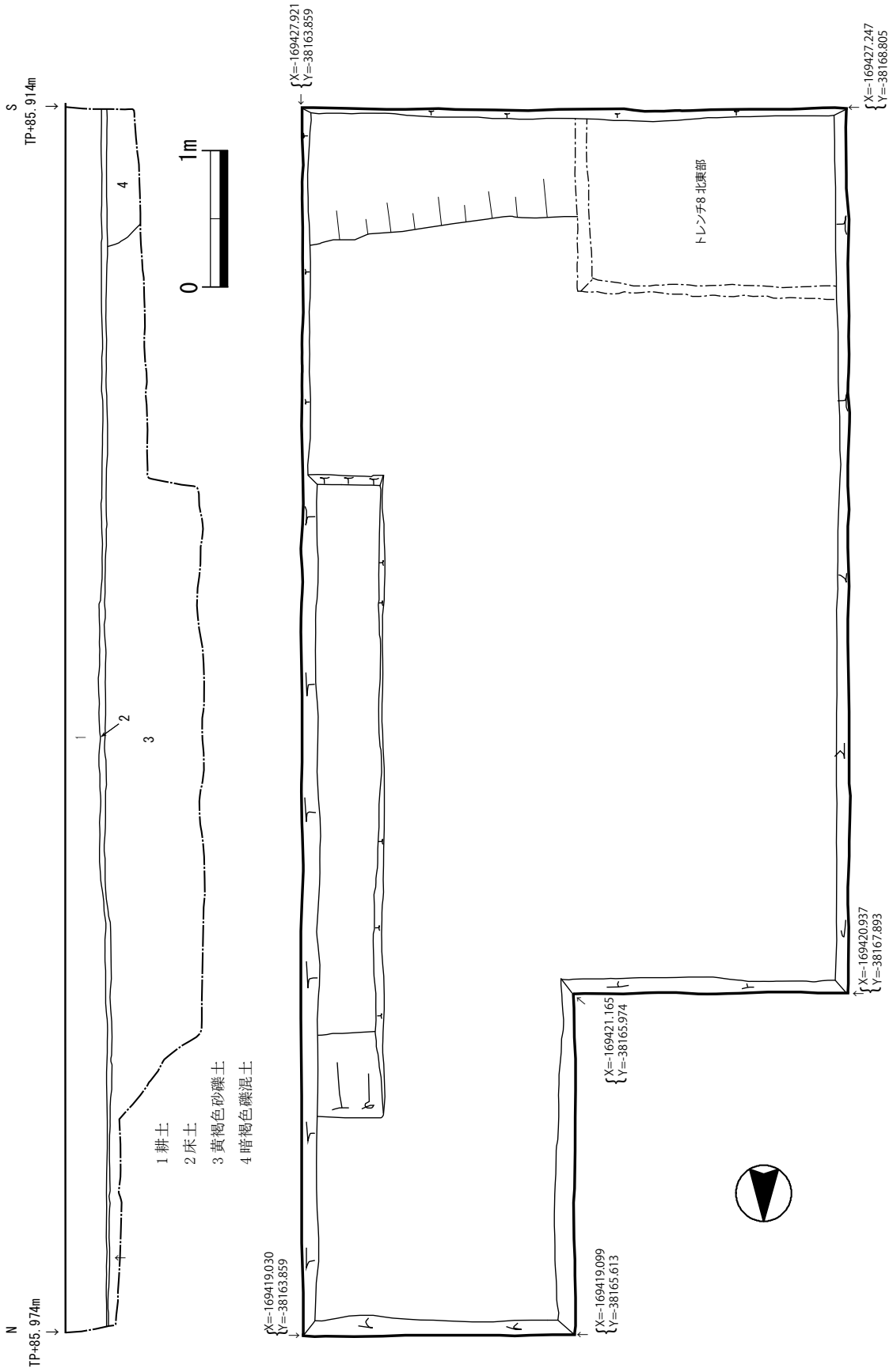


図 13　トレンチ 16 平面図・南北断面図

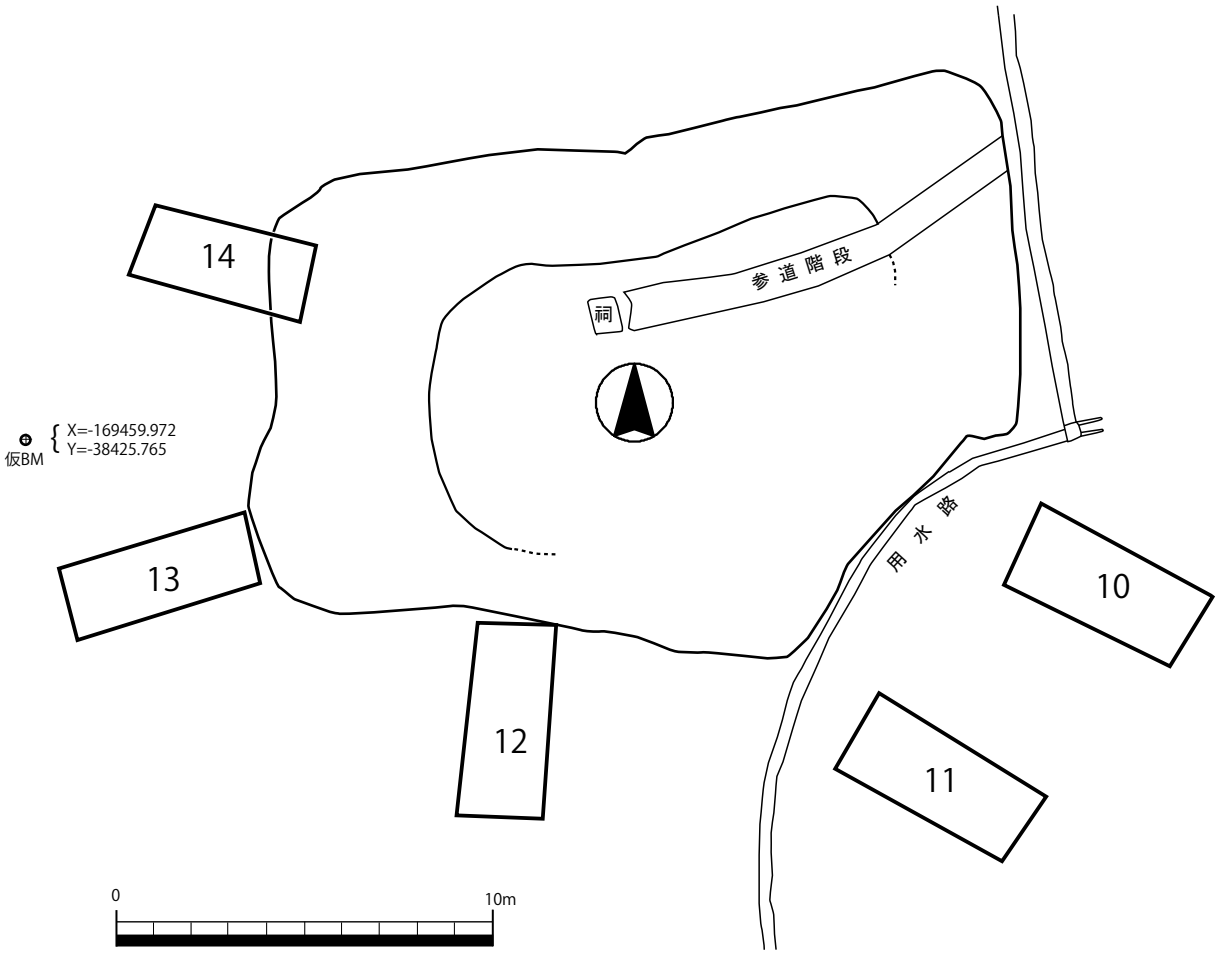


図 14　４号墳周辺の調査区

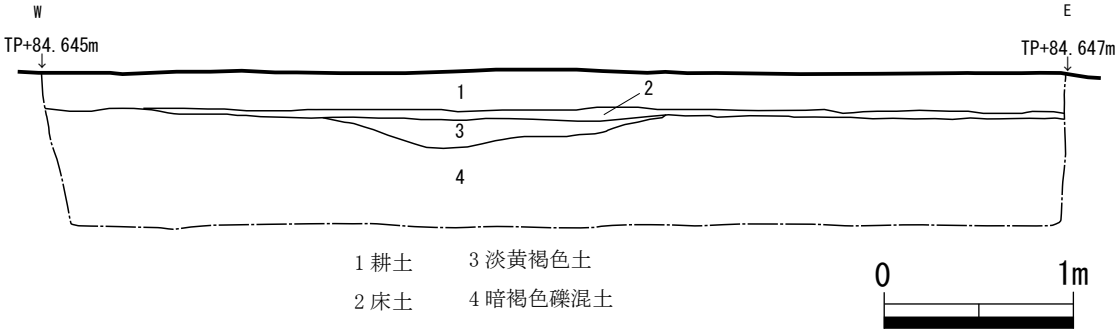


図 15　トレンチ 10 東西断面図

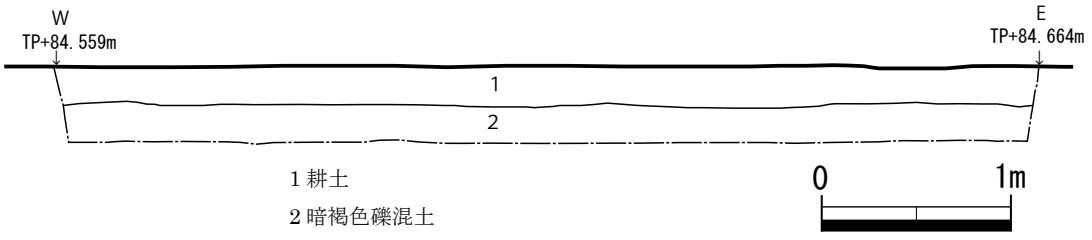


図 16　トレンチ 11 東西断面図

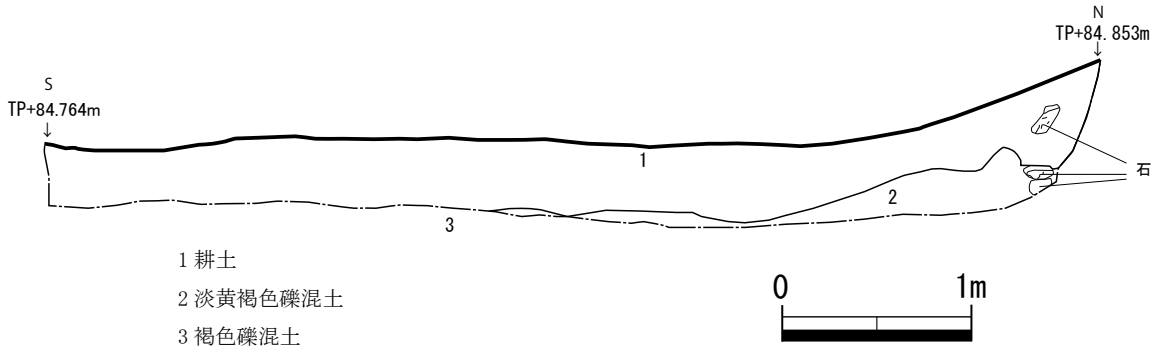


図 17　トレンチ 12 南北断面図

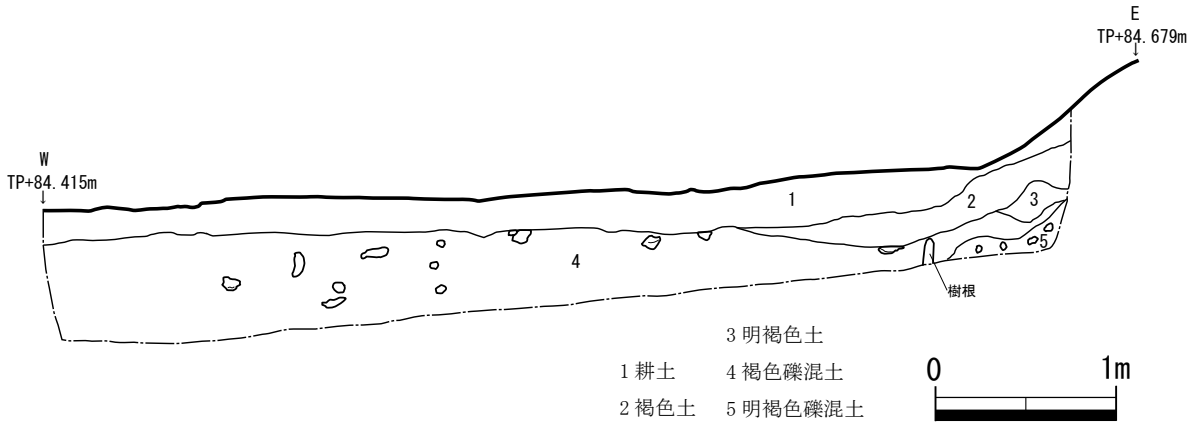


図 18　トレンチ 13 東西断面図

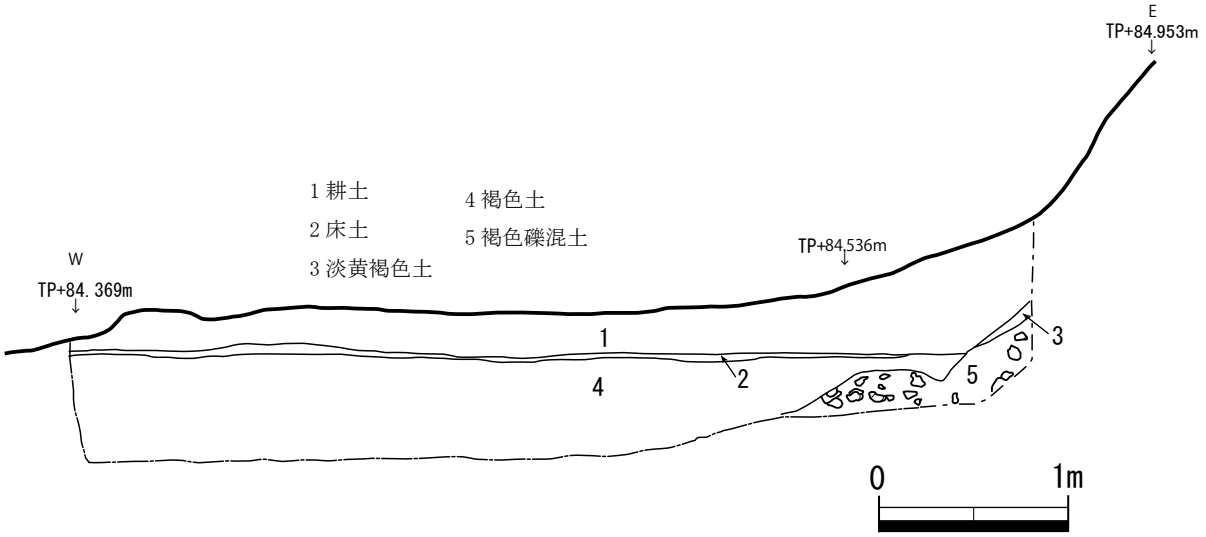


図 19　トレンチ 14 東西断面図

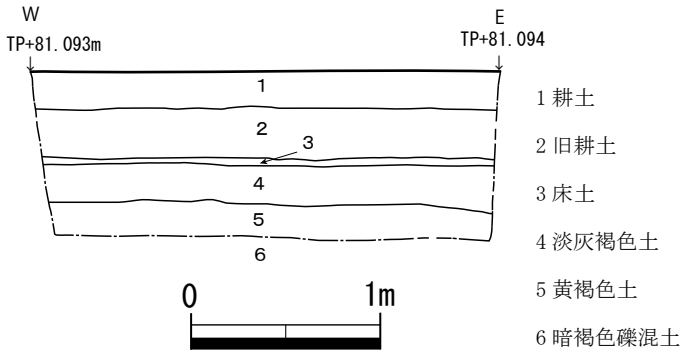


図 20　トレンチ 1 東西断面図

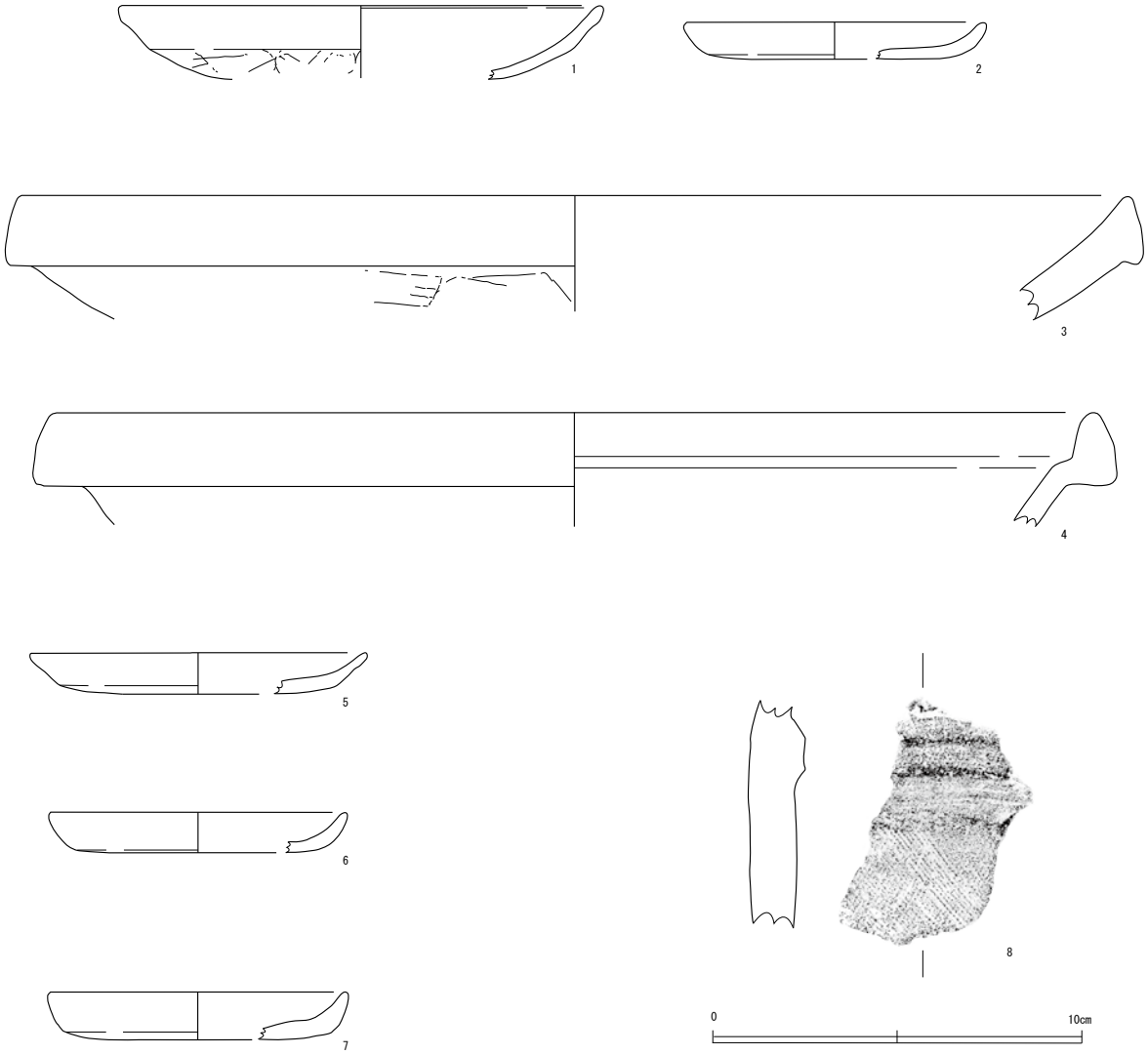


図 21　出土遺物実測図

第３章　調査のまとめ

今回の調査の結果は以下の諸点に要約される。

1.　昭和 54 年に行われた大阪文化財センターによる 1 号墳北側の調査では、周溝は幅 6.5 m、深さ 0.8 mという規模が推定されている。今回は現用水路を越えた南側において、墳丘に直行する形で 6 箇所のトレンチを設定した。

トレンチ 4 および 6 で現用水路以前の水路の南肩の一部が検出されたが、これが古墳周溝の位置を踏襲するものかどうか、確定はできない。一方、センター調査で確認された周溝基盤となる砂礫土やその上に堆積する黒褐色～灰褐色の砂礫・粘土と、今回の 5 箇所のトレンチで観察された中世耕土層以下の暗褐色～黒褐色の粘質土・礫土とが同じ層か検討するため、トレンチ 5 を南に延長してこれらの土壌の堆積範囲を観察した。その結果、中世耕土層から 1 点の埴輪片が出土したものの、それ以外に古墳に関連する遺物の出土はなく、暗褐色・黒褐色の粘質土・礫土の堆積はトレンチ南端まで及んでいた。おそらく中世耕土層以下のこの一連の堆積土は、すべて当地の氾濫平野が形成される過程で繰り返された土石流の痕跡と推察する。ただし、それは現用水路を挟んだ南側一帯に限った様相である点にも注意しておきたい。

以上、今回の調査では 1 号墳の周溝と判断される遺構は検出されなかった。周溝を検出したセンターによる調査では、設定されたトレンチは今回の調査区に比べ、より墳丘に近接した位置であることから、 1 号墳の様相を明らかにするには、現用水路より墳丘側の地点で調査を実施する必要があると思われ、今後の調査に期待したい。

2.　2 号墳周辺では北側に 3 箇所、南側に 1 箇所のトレンチを設定した。北側のトレンチ 8 の拡張部（トレンチ 16）では南端で黄褐色砂礫土を埋土とする落ち込みが検出された。このトレンチの東側では令和元年度の本府の調査によって幅 4.5 m、深さ 0.7 mの周溝と思われる遺構が検出されている。この落込みがその遺構に連続する可能性もあるが、断定はできなかった。

南側のトレンチ 9 では、暗黄色粘質土の地山に褐色砂礫土を埋土とする幅 4.0 m以上、深さ 0.8 m以上の落込みを検出した。ただし、古墳に関連した遺物は出土せず、周溝の存在を断定するにはいたらなかった。

3.　4 号墳周辺では墳丘西側に 2 箇所、南側に 3 箇所のトレンチを設定したが、耕土・床土以下はすべて砂礫土であった。耕作土中よりトレンチ 10 では近世～近代の陶磁器片、トレンチ 14 で器種不明の土師器細片が出土している。トレンチ 12 ～ 14 では墳丘裾まで掘り下げたところ、10 ～ 20 ㎝大の礫を多く含む締まりのない砂礫土の盛土の立ち上がりが観察された。この砂礫の盛土を古墳の封土とみることはできない。また周溝と考えられるような遺構も検出されなかった。

4.　古墳以外の地点では令和 2 年度の調査区の 20 メートル北に設定したトレンチ 1 で、耕土・床土下に中世包含層を確認した。遺構は検出されなかったが、包含層出土の中世遺物は前回調査の結果と矛盾せず、また包含層下の暗褐色土上面は前回検出された集落跡の遺構面に続くものと考えられる。

図　　版

図版一　一号墳（明八塚）・二号墳（千代塚）全景

1 号墳全景（南から）

2 号墳全景（北から）

図版二　トレンチ一・二・三・四　断面

トレンチ１北壁断面

トレンチ２北壁断面

トレンチ３北壁断面

トレンチ４北壁断面

図版三　トレンチ五　断面

トレンチ５全景（北から）

トレンチ５断面細部（北半部）

図版四　トレンチ六・七　断面

トレンチ６西壁断面

トレンチ７東壁断面

図版五　トレンチ八・九　断面

トレンチ８西壁断面

トレンチ９西壁断面

図版六　トレンチ一〇・一一　断面

トレンチ 10 北壁断面

トレンチ 11 南壁断面

図版七　トレンチ一二・一三　断面

トレンチ 12 西壁断面

トレンチ 13 西壁断面

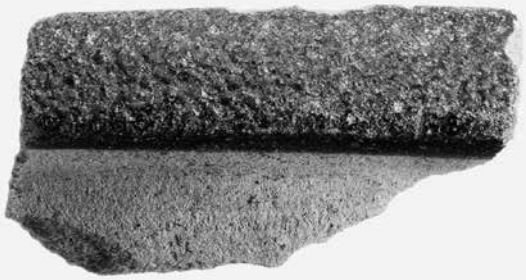
図版八　トレンチ一四・一六　断面

トレンチ 14 北壁断面

トレンチ 16 東壁断面

トレンチ 16 東壁断面

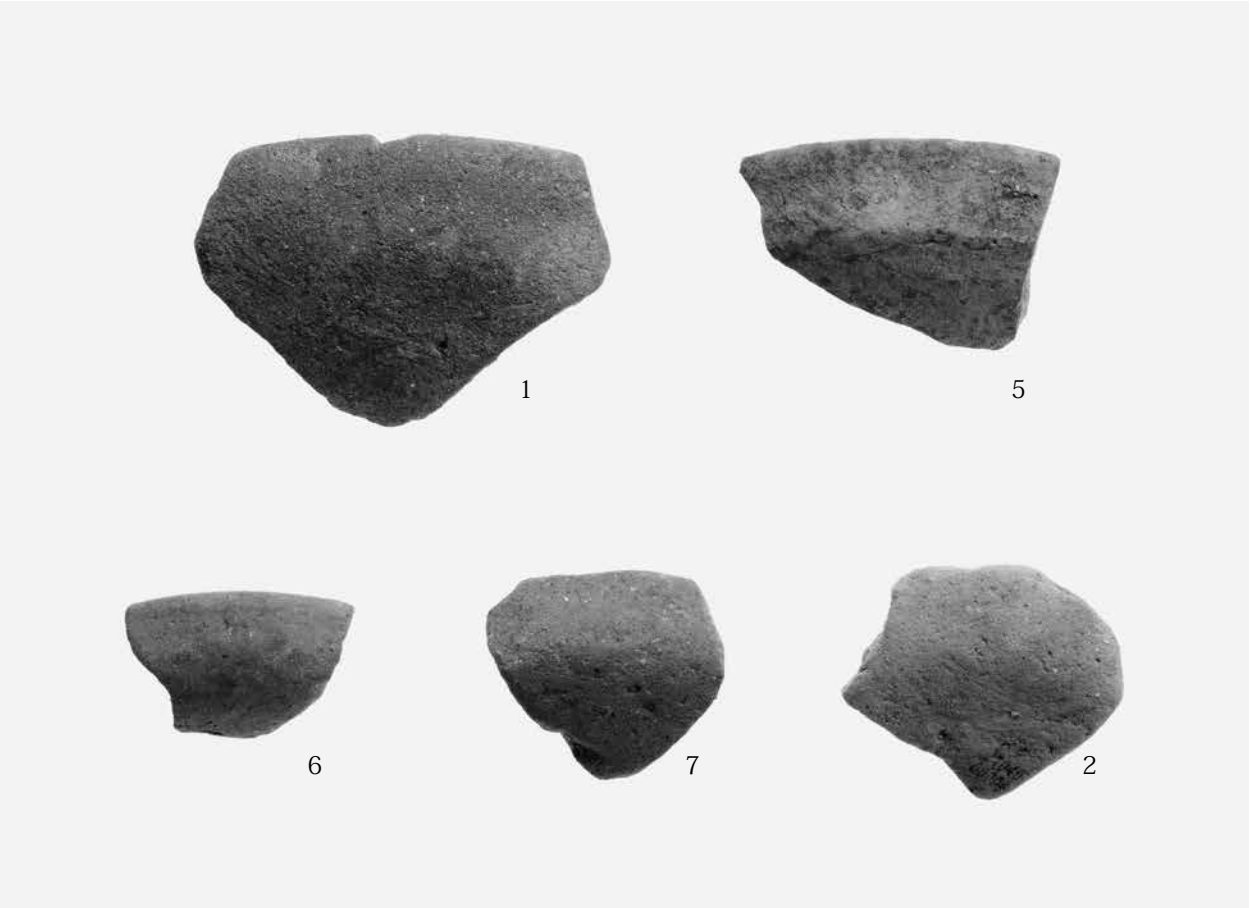
3



4

8

図版一〇　出土遺物　二



報告書抄録

ふりがな	にしののこふんぐんかくにんちょうさがいよう
書名	西野々古墳群確認調査概要
副書名	府営農村総合整備事業「伏見堂地区」に伴う確認調査
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	関真一・枡本哲
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前二丁目　TEL 06-6941-0351
発行年月日	2023年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積 (㎡)	調査原因
西野々古墳群（にしののこふんぐん）	大阪府（おおさかふ） 富田林市（とんだばやしし） 伏見堂（ふしみどう）	27214	4296	34° 28' 19"	135° 35' 03"	20211101～ 20211227	128	府営農村総合整備事業「伏見堂地区」

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西野々古墳群	古墳	古墳時代 中世	なし	土師器・埴輪	

要約	古墳の範囲を明らかにするため、墳丘の周囲にトレンチを設定し調査を実施したが、古墳に関連する遺構は確認されなかった。なお、中世耕作土層より埴輪片が1点出土した

西野々古墳群確認調査概要
－府営農村総合整備事業「伏見堂地区」に伴う確認調査－

発　行　　大阪府教育委員会
〒540－8571　大阪市中央区大手前二丁目
TEL 06－6941－0351（代表）

発行日　令和５年３月31日

印　刷　株式会社　近畿印刷センター
〒582－0001　柏原市本郷５丁目６番25号